

5 生き抜いたから今の幸せ
 —揚原てる子のライフストーリー—

聞き書き：資料収集調査員 広崎 純子



2003年3月3日自宅にて

揚原てる子（あげはら てるこ）の略歴

- | | |
|----------------|--|
| 昭和3(1928)年9月1日 | 山形県西村山郡本道寺村月山沢 <small>にしむらやま ほんどう じむらつきやまざわ</small> に生まれる
3歳の頃に母を亡くし、長兄夫婦に育てられる |
| 昭和16(1941)年6月 | 父、長兄家族とともに渡満、依蘭県北靠山屯開拓団に入植
その後、3番目の兄も渡満 |
| | 1944年頃、長兄家族に末娘誕生 |
| 昭和20(1945)年5月頃 | 兄2人が徴兵される |
| 昭和20(1945)年8月 | 敗戦、避難
避難の途中、開拓団で生まれた姪（長兄の末娘）が死亡
9月頃から、方正 <small>ほうせい</small> 県の収容所にて生活
11月頃、兄嫁とその長男が収容所にて死亡 |
| 昭和20(1945)年12月 | 結婚（父とともに婚家へ）、方正県に残留 |
| 昭和21(1946)年1月 | 3番目の兄がソ連にて死亡 |
| 同年7月 | 父が方正県の婚家にて死亡 |
| 昭和22(1947)年 | 長兄がソ連から帰国 |
| 昭和24(1949)年 | 長男誕生 |
| 昭和50(1975)年 | 三女（当時8歳）を連れて山形県に一時帰国 |
| 昭和59(1984)年9月 | 次男・嫁、三女とともに永住帰国、山梨県に滞在 |
| 昭和62(1987)年 | 夫と四男の家族が来日。この頃、上京 |
| 平成元(1989)年 | 長男の家族が来日 |
| 平成2(1990)年 | 長女の家族と三男の家族が来日 |
| 平成3(1991)年 | 次女の家族が来日 |
| 現在 | 東京都江東 <small>こうとう</small> 区在住。夫と2人暮らし |

はじめに

^{がっさん} 月山を望む、山間の小さな村で生まれた。「満洲へ渡れば白いご飯が食べられる」という言葉を信じ、父や兄に連れられ 13 歳で満洲に渡った。だが、行き着いた先は、白いご飯どころか、お腹を満たすに十分な食料すらない、ただただ広がる大地だった。それから、30 数年、一時帰国を果たすまで、あこがれの「白いご飯」を口にするとはなかった。

1. 山形での生活

生い立ち

昭和 3 (1928) 年、山形県西村山郡本道寺村で 4 人兄妹の末っ子として生まれました。母はわたしが 3 歳の時に亡くなったので、写真で見るばかりです。母のことは何も覚えていません。20 歳以上も年上の兄を父だと思って育ちました。実の父のことはずっとおじいちゃんだと思っていました。兄の子どものほうがわたしより生まれたのが早かったので、小さいころはその姪を、お姉さんだと思っていました。今から思えば、「お姉さん」なんて呼んだこともなかったし、いくらいたずらをして叱られたこともなかったので、変だなあとは感じますが…。月山沢小学校に通うようになってからは、農繁期になると家の用事が忙しいからと「暇もらって来い」と言われ、学校を休んでうちの手伝いをしていました。と言っても、わたしはまだ小さかったので、掃除をしたり子守をしたりすることが多かったです。夏は田んぼ、冬は炭焼き、大人が炭を入れる袋を編む横で、姪たちが縄をない、わたしはもっぱら子守でした。

あこがれの満洲へ

満洲に渡ったのは、昭和 16 (1941) 年の 6 月です。家族は、父と兄夫婦とその子どもたち、全部で 9 人くらいいたでしょうか。わたしは 13 歳、小学校を卒業したばかりで、その年の 4 月に尋常高等小学校に入学したばかりでした。その頃、活動写真が上映されたり、満洲から帰って来た人の話を聞く場が設けられたりしていました。家の人もみんな活動写真を見て、「満洲はいいところだ」「みんなが行くから行こうか」と言っていました。父は、日清戦争でハルビンまで戦いに行っていたので、中国がどういうところかわかっているから、「行こう行こう」と随分乗り気でした。

活動写真では、満洲は広いところだ、中国はいいところだ、土地は肥えているし、うちはただでもらえるし、畑もただでもらえるし、肥料を入れなくてもかぼちゃもじゃがいももこんなに大きいのがとれると宣伝していました。だからみんな「いいね、いいね」って言っていました。わたしはあの頃 13 歳で、まだ小さいから「満洲に行くよ」って言われても、「外国に行くのか?」、「行ってどうなるのかなあ?」と思いましたが、1 人でうちに残って生活で

きるものじゃないし、大人について行くしかないから、どうしようもなくついて行きました。大人の方は、あの頃の方は今の人みたいに賢くないから、活動写真を見て、満洲はいいところだと思い込み、満洲に行けば裕福になれるって思って行ったんでしょう。今から思えば、あれは死ににいったようなものだと思いますけどね。

2. 渡満、開拓団での生活

入植

わたしのうちでも、父と兄が訓練所に行き、合格して、渡満することになりました。渡った先は、三江省（現在の黒龍江省）の依蘭県です。依蘭に着いて、そこからまた今度は北靠山（てる子は「きたこくさん」と発音）というところに行くために、牡丹江を舟で渡りました。向こう岸に着くと、目の前には広い広い野原が広がっていました。木1本もない、うち1軒もない、ただただ広がる荒れ野原の中をようよう1日ばかりで歩いて、北靠山屯開拓団というところに着きました。

山形にいた時には、「満洲に行けば白いご飯が食べられるから」って、そういうふう聞いていました。うちは貧乏で、ご飯といっても大根やじゃがいもを入れて食べていたから、「満洲へ行けば白いご飯がたべられるんだなあ」って、そう思っていました。ところが、着いてみたら、ご飯もない、何にもない。共同炊事だったから、食事ができるとサイレンが鳴りました。それを聞いて、みんな器を持って取りに行くんです。見たら、赤くて、小豆の入っているもの、おいしそうだなと思ったけど、口に入れるとごそごそして、喉を通りません。それがコーリャン、コーリャンに小豆を混ぜたから赤い色をしていたんですね。

尋常高等小学校に通う

毎日2、30分も歩いて、学校に通いました。学校は8時半に始まるから、毎朝8時前にうちを出ました。どんなに朝早くても、学校へ行く途中の道すがらでは、中国人が畑の草取りをしていました。日本にいた時は、「満洲に行けば匪賊がいるから気をつけなさいよ」と言われていたから、匪賊がいるんじゃないかと思うと怖くて怖くて、人の気配がすると、匪賊じゃないかと思って、走って走って学校に行きました。食べるものも十分じゃなかったから、学校から帰る頃にはお腹もすくし、カシバミという小さくてすっぱい木の実を取って食べたりもしました。

高等小学校には2年間通いました。冬になれば、風がいて、学校に行って授業を受けるにも痒くて痒くてじっとしてられなくて、動くと先生に怒られたことを覚えています。学校が終わってからは、急いでうちに帰って、また子守です。うちの大人の人たちはみんな畑に行き行って忙しいので小さかったわたしは、日本にいた時と同じように子守をしていました。開拓

団での生活は、想像していたよりも楽ではなく、食べるものも十分ではなく、冬になると畑の土の中に埋めておいた白菜や大根を取ってきては、なんとか料理して食べるという生活でした。また寒さをしのぐために暖をとるための焚き物取りもわたしの仕事でした。

畑仕事 — 大地に沈む真っ赤な太陽を背に

高等小学校を卒業してからは、わたしも父や兄夫婦を手伝って畑仕事に出るようになりました。毎日草取りをして、きゅうりやもろこし、大豆を植えて、育てました。まあ大きい広い野原で、あっち見ても野原、こっち見ても野原、畑から上り畑に沈む太陽と一緒に、陽の出ている間はずっと畑で働きました。朝の大地から上る太陽と、夕方大地に沈む大きくて真っ赤な太陽の美しさは今でも忘れられません。その頃は、働いて働いて、楽しいなんてことは何もありませんでした。ただ、働いてお金が貯まったら日本にでも里帰りしようかって大人たちは話していましたけれど、楽しいなんてなかったですね。

兄たちへの召集令状

満洲に渡ってから4年目の春先のことでした。その頃には、18歳くらいから40歳くらいまでの男の人はみんな召集されていて、先生もいなくなりました。うちからは、兄が2人召集され、残されたのは、兄嫁と子どもたち、それから年老いたわたしの父だけでした。

わたしは、週に1度、青年学校に通っていました。最後に青年学校に行った時、みんな召集されて誰もいないのですが、お医者さんが1人、院長先生が1人残っていて、「もしも日本が負けたらこの学校に入って玉砕せよ」と言われました。

その頃、2月か3月頃には、水を汲みに川まで行くと、遠くの方でバーン、バーンという大きい厳しい音がするのが聞こえました。そして顔を上げて見ると、黒い煙があたり一面に立ちこめていて、何も見えなくなりました。そこに水を汲みに来ている大人たちは、「日本が負けたんじゃないか」なんて話していましたが、それもわからないし、そうこうしているうちに8月になりました。8月何日だったかはっきり覚えていませんが、「今度ここが戦場になるからみんなここを避難しなければならん」って言うわけで、逃避行が始まりました。

3. 逃避行

逃避行の始まり

馬がいる人は、馬に子どもを乗せて、食料を少し持って、着るものも少し持って、それを馬車に乗せて、満炭^{まんたん}というところまで行くと暗くなりました。そこで1晩泊まったのですが、

中国人はたくさんいるし、夜になるとがやがやがやがや音はするし、大きい話し声は聞こえるし、なんだか喧嘩でも始まるんじゃないかなあって、みんなが話していました。でも、誰も中国人に話しかけることもできないので、不安な気持ちのまま1晩すごしました。夜が明けると早く起きだして、起きるとまたすぐ避難です。また歩いて歩いて、今度は沙河子(てる子は中国語の音で「シャホーズ」と発音)というところに着きました。沙河子に着いて、今度はそこから舟に乗って、ハルビンに向うというわけで、まず伊漢通^{いかんつう}というところまで行きました。伊漢通で1度舟を降り、2晩泊まりました。そこには日本の兵隊さんが大勢いましたが、話をすることもできないまま、2晩を過ごしました。そうしたら、また上の方から話があって、ハルビンには向えないから帰るしかないということで、沙河子に戻ることになりました。沙河子で舟を降りた時には、わたしたち北靠山の開拓団だけじゃなく、あっちこちの開拓団の人たちがそこに集まっていました。「もう1度開拓団に戻って生活をしよう」と言う人もいましたが、他の団の人が「開拓団には戻れない、行ったら殺される」というわけで、みんな集まっての避難が始まりました。

いつ終わるとも知れぬ逃避行

歩いて歩いて歩いて歩いて、歩く途中みんな疲れるし、お腹はすくし、持ってきた食料もすぐ底をつきました。最初のうちは、飯盒に少しの米と水をいっぱい入れて煮て、おもゆを作り、1人2口3口ずつ食べて命をつなげました。でも歩くうちにだんだん食べるものもなくなっていき、途中でじゃがいもがあればそれを取り、洗う暇もないので土だけ落として生のまま食べました。もろこしがあれば皮を剥いて生のまま食べました。あの頃は雨降りだったから、ぬかるみの中を歩きました。うちの父は、兵隊に行っていて、刀を持っていたので、その刀で木を切って、雨に濡れないように、木の葉を傘の代わりにして歩きました。喉が渴いて渴いて、でも飲み水もなく、雨水がたまったところを掬って1口2口飲んでまた歩き続けました。

食べるものもない、飲むものもない、ほんとどういふふう^{ふう}に歩いたのか覚えていません。履いていた靴もなくなるし、雨の中も風の中も歩き続けて、日が暮れば山の中で1晩過ごし、朝、陽がのぼると目覚め、「ああまだ生きているんだなあ」と思いました。どこをめざして歩いているのか、いつ終わるのかも知れないまま、ただただ歩き続けました。子どもを2人も負ぶっている人もいて、歩き疲れた人の中には子どもを藪の中に置いていった人もあると聞きました。子どもに泣かれて、このままだと中国人に見つかって殺されるからと、子どもを置きざりにして歩き続けた人もいるということです。

川を渡る

途中に川がありました。深くて流れが強くて、歩いて渡ろうにも渡ることもできません。兵隊さんのあとについて歩いていたので、小さい子どもたちは兵隊さんが抱きかかえて渡って

くれました。わたしたちは、兵隊さんが馬をひっぱって、その馬の尻尾につかまって、川を渡りました。渡るともう日が暮れていて、1晩休んで、また歩き始めました。誰かが「あそこで馬殺したから馬の肉があるよ」というのを聞いて、そちらへ行って見たこともあります。その頃、大勢の避難民、何千人という避難民が逃げていましたから、わたしたちがそこに着いた時には、殺したばかりの馬はもう影も形もなくなっていました。どうしようもないからまた歩いて歩いて、1つの部落に着きました。

その部落では、ロシア兵が番兵をしていました。間近で見るロシア兵は怖くて怖くて、1人1人持ち物の検査をされました。うちの父の刀は、そこで取り上げられました。刀を持っているからと、殺されるんじゃないかとびくびくしていましたが、命をとられることはありませんでした。満人が餅干ビンガヌ（ビスケットのこと）を売りに来ました。うちの家族でもビスケットを1袋買って、1人に2つ3つくらいずつ食べました。ほんの少しのかすかに甘いビスケットでしたが、あの味は今でも覚えています。

避難の終わり — 方正県に辿り着く

その部落を出てまた歩き続けました。日本の兵隊さんたちがぞろぞろと隊列を組んで歩いているのにぼったり出くわしたこともあります。他の人が「日本は負けたんですか」と聞いたんですが、兵隊さんたちは一言も返事もしないでぞろぞろぞろぞろ歩いて行きました。みんなのどが渴いて渴いて、「水のあるところ探せ」って、水があればそれを飲み、少し休んでいる間に、歩きつかれた年寄りや子どもたちはぐったりと寝込んでしまうこともありました。それでも歩き続けなければいけないので、行こう行こうと励ましあい、寝ている子どもたちや年寄りたちを起こして、また歩きました。そしてようよう避難が終わってたどり着いたのが、方正県の開拓団の村です。どれくらい歩き続けたのでしょうか。

4. 方正県収容所での生活

夏の終わり — 方正県開拓団跡での生活の始まり

方正の開拓団が避難していなくなってしまった跡に、南北靠山屯ぼだいとん、馬大屯（てる子は中国語の音で「マーダトゥヌ」と発音）、北靠山屯の3つの開拓団が集まりました。今度はここからどこにも動かせないから、ここでみんな生活しなければならないと言われ、そこが収容所になりました。1つの部屋に何十人という人が泊まっていました。8月の終わり頃か、もう9月になっていたでしょうか。まだ暑くて、こうして横になって寝ていても、ちょっと動けば隣の人にぶつかり、ゆっくり寝られるというものではありませんでした。

あの頃はほんとうに怖かったです。ソ連兵が毎日毎日馬に乗って歩き回っていて、女の人の中にはロシア兵にいたずらされる人もいましたが、誰も手を出すこともできないし、助ける

こともできません。わたしも髪を伸ばしていられなくて、坊主頭にして、少しなにかがあれば顔につけて顔を黒くしたりして、男のような格好をしていました。女だということがロシア兵に見つかればつかまって縛られてしまうからです。あの頃はただただロシア兵が怖かったですね。

兄嫁の死 — 子どもたちだけの生活

うちのお姉さん、兄嫁は収容所で病気になりました。だから、お姉さんの子どもたちの面倒はみんなわたしが見ていました。山に野菜や木の実や焚き物を取りに行きました。方正の東方に砲台山ほうたいさんという山があって、そこで日本の兵隊が戦争の準備をしていたそうです。毎日そこへ通って、残されていた缶詰や味噌を拾ってきました。遠かったですよ。そして今度は9月頃になると、ロシア兵からモミ、精米する前の米ですけど、それと大豆が配布されるということで、伊漢通というところまで取りにいきました。あの頃はバスも何もないから、歩いて伊漢通まで行って、背負って帰って来ました。モミが配給されたのはいいけれど、臼を使ってついて米にしなければ食べられません。今度は、臼づきがわたしと兄の大きい子どもの仕事です。臼は1つしかなく、昼間は他の人が使っているし、わたしは山に食料を取りに行くので収容所にはいないし、わたしたちは夜、お月さまの明かりの下で、モミをつきました。2人ともまだ子どもですから、1回についてもせいぜいお茶碗にいっぱいぐらいしかつかれません。それを家族で分けあって食べて命をつなぎました。

秋 — 多くの人の死を看取る

そうこうしているうちに夏も終わり、だんだん寒くなっていきました。食べるものもだんだんなくなり、大豆の腐った豆なども口にしました。鼻につくいやなおいがあるんですが、他に食べるものもないのでしかたありません。あの頃は雨も降らず、外で日向ぼっこをしながら、虱を取りながら、口にできるものは何でも食べて、それこそ毎日少しづつ命をつなげつなげ、冬を迎えました。方正は、10月、11月にもなると、だんだん寒くなり、零下30度以上の寒さになります。お年寄りや伝染病にかかった人が、毎日毎日、ころころと死んでいきました。お金のある人は、死んだ人に饅頭をお供えしたりもしていました。わたしと友だちは、「どこどこで人が死んだよお」なんて聞くと、「行ってみよう」って、見られないように見つからないように隠れて亡くなった人のそばまで行って、人が帰ったあとお供えしてある饅頭を取って食べたりしたこともありました。いざというと怖い恥ずかしいのという気持ちはなかったです。ただただ自分の命ばかり惜しくて、命あって日本に帰る、日本に帰って、そればかりでした。

お兄さんのお嫁さんと子ども1人も収容所で亡くなりました。でも、人が死んで悲しいなんていう気持ちはなかったです。いざとなると、親も子もない、自分のためだけ、食べたい、自分の命をつなぎたい、それだけでした。人がどんどん亡くなっていき、最初は1人1人看

取っていましたが、あとからになると看取することもできなくなり、野原に死体を置いてきました。枯れ木を積んだように山ほど遺体がありましたが、怖いっていうのはありませんでしたね、いざといえば。

冬 — ばらばらに中国人の家へもらわれていく

11月頃、12月頃になってからは、中国人の人が、15歳以下の子どもは、自分たちの子どもとして、16歳以上の女の人は、嫁として、もらいに来るようになりました。11月頃というと、もう零下30度という寒さです。綿入れだっていない、履くものだっていない、食べ物もない。ただここにいれば死んでいくばかりだからって、どうしても日本へ帰ろう、満人だっってもらってくれる人がいるなら、満人のところに行って、冬を越して、日本へ帰ろうって…。お兄さんの子どもたちは、そこでてんでばらばらにあっちこっちの家へもらわれていきました。あの頃は、誰がどこへ行ったかなんてわかりません。

5. 結婚生活

父とともに婚家へ

わたしも、いやだいやだと言ったんですが、年老いた父が、もらってくれるっていう人がいるならいい、ご飯でも食べさせてもらって、命長らえて、あつたかくなったら日本へ帰ろう、と言うので、父を連れて、満人の、今の旦那のうちへ嫁に行きました。嫁として満人のうちに行くなんて、どうするのかもわからないし、まだ17歳だし、怖かったです。行ったら殺されるんじゃないかと思ったりもしました。

夫の家は、方正、方正っていうけれども、町の中心から遠く離れた村で、馬車に乗ってまるまる1日かかりでようやく着きました。「着いたよ、ここがあんたのうちだよ」と言われても、「あれ？こんなうち、うちは曲がっているし、こんなうちどうやって住むんだろう？」と思いました。そのうちに着いてからは、こんなうちにはいないで、逃げよう、逃げて日本へ帰ろう、ってそんなことばかり考えていました。

父の死

年が明けて、5月か6月頃でしょうか、今度は父が寝たきりになりました。年老いた体で食べ物も飲み物も十分でない避難生活と収容所生活のせいで、栄養失調になっていたのでしょう。行った当時から、食べるものもなく、父は、焼いた炭をつぶして飲んでいました。「それ何にするの？」と聞くと、「薬だよ、胃の薬だよ」と言って。夫の家も貧乏だったので、病気だからといっておかゆを食べさせてあげられるわけでもない、お医者さんと呼べるでもない、

薬を飲ませられるわけでもない、ただただ毎日を過ごすだけで、7月ごろ父は亡くなりました。父のことで一番覚えているのは、看病をしていた時のことです。ようようわたしの父だということがわかりました。それまでは「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼んでいたの、祖父だとばかり思っていました。今から思えば、開拓団で生活していた頃、外遊びから帰って来たわたしが脱ぎ捨てた服を、一つ一つたんでくれたのは、あれは親の愛情だったのかなぁと思います。父が亡くなったからって、やはり悲しいなんていう気持ちはありませんでした。死んだらよかった、今度はわたし1人で日本へ帰るって、逃げようって、そう思いました。

あの頃死んでいく人は、まだ息も切らないうちにコーリヤンの皮でくるんで、引っ張って行きました。うちの父はよかったほうです。箱を作って、その中に父の遺体を入れて、夫の家族に「何かお父さんに入れるものはあるか」って聞かれたから、父の長靴とオーバーとキセルと煙草入れと眼鏡と、それこそ父の使っていたものは全部そこに入れてやりました。父のものを全部入れてしまえば、もう父のことを思い出さないだろうから、そうしたらあとは自分1人して逃げようって思いました。でも、逃げられなかったんですけど…。

望郷 — もしも鳥だったら飛んで帰れるのに…

父が亡くなってから、逃げようと思っても逃げられるものではありませんでした。わたしが逃げれば、部落中の人みんなして探します。探されればあとは殺されるだけです。それこそ、夜に外に出て月を見上げ、今日も月が明るいなぁ、日本へ帰りたいなぁ、日本でもこの月を見ているのかなぁ、もしも鳥だったら飛んで帰れるのになぁと、思いを巡らしたりもしました。でもどうしようもない、またうちの中に入って、1年1年と暮らすうちに、今度は子どもが生まれました。

帰国の噂

夫のうちへ行った次の年、昭和21年だったでしょうか。昭和21年の8月か9月頃、1度日本人が日本に帰るという話を聞きました。わたしが住んでいたのは、山のほうの部落だったから、みんな噂、噂として聞こえてきました。わたしの部落には日本人は4人しかいなかったんですが、行った当時は日本人とは会わせてもらえなかったし、日本人同士が集まって日本語を話してもいけなかったんです。それでも、12月頃だったでしょうか、一番寒い頃でした。みんなで集まって、「揚原さん、日本に帰る？」なんて話をしました。「帰られるならあたしも帰るよ」って4人で話して、うちに帰って舅に日本へ帰るって言ったところが、「お金出してあんたを買ったんだから、日本へは帰されないよ」と言われました。

それでも、みんなで方正の町の方まで行ってみようって、そっちに行って手続きをしなきゃ

いけないからって、行ってみました。途中で町の係長という人に出て、「どこへ行くの？」と聞かれて、「日本に帰る」と言うと、「日本に帰る人ならもう帰ってしまっていないよ、あんたたちは騙されたんだよ」と言われ、また部落の方へ戻って来ました。わたしは、その時には、方正の町の方には行かずに、親戚のうち、お兄さんの子どもがもらわれて行った先のうちへ遊びに行っていました。夫のうちへ帰ってみると、「日本へ帰られなかったよ、わたしたちは騙されたんだよ」と聞かされました。逃げるに逃げられないんだ、この部落で生きていくしかないんだと思い知らされました。

ここで生きる

結婚した当時は、中国語もわからない、何も話もできませんでしたが、わたしにあれだこれだって話しかけてくれる人がいました。旦那は、部落の役員をしていたから、うちにいないことが多かったです。水汲みに行くのもわたし、豚やあひるの世話をするのもわたし、薪割りをするのもわたしでした。天秤棒を担いで川へ水を汲みに行くと、女の人が水汲みに行くのはかわいそうだからって、汲んできてくれる人もいました。薪割りをしていると通りがかった男の人が割ってくれたりもしました。旦那が役員をしているから、やっぱりみんないろいろ気を使ってくれていたのかもしれない。

旦那は会議があるからと県の方に行って、会議での話し合いをみんな頭で覚えてきました。あの頃の中国の人は、学校へ行ってないから、学問ないから、書くことができなかったんです。うちに帰ってくると今度は部落の人を集めて、夜の10時11時頃までまた会議をしていました。旦那は昼も夜もうちにいないということがよくありました。

子育てに追われて

1年くらいすると、だいたい人の話していることもわかるようになりました。自分でもやっぱり意地っていうか、何ていうか、覚えようって必死になっていたところがありました。夜学校という勉強する場所もあったんですが、1日だか2日だけ行っただけでしたね。あの頃一番大きい息子が1歳で、子どもを見てくれる人もいなくて、子どもを連れても行かれましたからです。少し学校にでも行けば、中国語もわかって、書くこともできるようになったのかもしれませんが…。生活しながら少しずつ中国語を覚えていきました。子どもたちが学校へ入ってからは、学校の本を見ながら、子どもの本は簡単だから、それを見て少しぐらいは、読み書きも覚えました。

近くに日本人も何人か住んでいましたが、日本人のところに行かせてもらえないし、日本語も話させてもらえませんでした。それでも日本語忘れないようにしよう、紙でもあれば字でも書いて忘れないようにしようって思っても、紙1枚ない、鉛筆1本ないから、書くに書か

れません。あの頃の中国は貧乏だったから。それでもたまに、日本語忘れないように土に書いたりしました。それも、子どもがいるとだんだん忙しくなり、そんな暇もなくなり、日本語を忘れていきました。

中国のご飯はもろこしだから、半日も炊かなければやわらかくなりません。だから、お昼のご飯は朝に炊いて、夜食べるのは昼に炊きます。うちには誰もいなかったから、あまり出かけることもできなくて、朝起きてから夜寝るまでつらい仕事ばかりでした。わたしは昼寝もあまりしたことがありません。昼寝をする時間があれば、ぼろつきをしていました。貧乏で着るものもなく、あっちついで、こっちついで、つぎはぎだらけの服を着ていました。冬になると、綿入れをつくるといっても、表をつぐのに1晩、裏をつぐのに1晩かかりました。中国の綿は小さくていいのはないから、小さい小さい綿をほぐして、作らなければなりません。1足のズボンを作るのにも2日も3日もかかりました。子どもが多いから、1つ作ると今度はあっちがこわれたと言って、今度はそっちのつぎはぎ、こっちがやぶれたと言うと、今度はそっちのつぎはぎ、新しいものを買うなんてことはなかったですね。靴だって当時は、自分で作っていました。小さいきれに糊をつけて貼り合わせて、1枚1枚靴の形に切って、それに糊をつけてまた重ね合わせて、どうやって作っていたのか、今はもう作られないですけど…。

病気で倒れたこともありました。それでも病院にも行かれないし、お医者さんにもみてもらうこともできません。倒れて1日半も寝込んで、夜中にラッパの音が聞こえてはっと目が覚めて、ふらふらしながら、ふーふーってご飯炊きして、子どもたちはまだ小さいし、よおくまあ（病気が）直ったなあって思いますね、これも運命でしょうか。

中国での生活は、楽しかったことなんてないですね。毎日それこそ、豚を飼ったり、あひるを飼ったり、にわとりを飼ったり、その餌をあげたり、忙しい忙しいの毎日でした。畑に行って、野原に行って、豚の草を刈って、持ってきて、豚に食べさせて…。だから、子どもがいてもどうやって育てるかなんてわからないまま、ただ病気にさえならなければいい、死なないで育てくれさえすればいいと思って、子どもが可愛いなんていう気持ちもなかったです。早く育てば、どうにかこうにか自分たちで生活できるまでに育てば、それまで我慢して、そこまで我慢して育てれば、ってそればかりでしたね。

共同生活の始まり

しばらくしてからは、共同生活、畑の共同生活が始まりました。わたしは子どもが多いから、子どもたちがみんな学校に行っている間はうちで留守番をしていて、土曜日とか日曜日に畑に出て働きました。留守番をしているところへ、部落の人がミシンで服を縫ってくれて、毎日毎日やって来ました。でも、部落だから誰もお金くれる人なんていません。頼まれれば

ただで縫って、ズボンとかなんとか自分で切って作りました。子どもがいなければ作るのも早いんでしょうが、子どもの世話もあるし、豚もいるし、夜の10時11時頃まで縫っていました。子どもも多いし、子どもは、一番上の子から一番下の子まで、20歳くらい離れていますから、随分長い間子育てをしてきました。

姪たちの消息

中国の人たちは、馬を買いに行ったり買いに来たりして、あちこちの部落を歩き回っていたので、そういう人から、どことこの部落に日本人がいるっていう話を聞くことができました。誰々って名前を聞くと、ああ、うちの親戚だ、お兄さんの子どもだってわかり、遠いところにいる親戚の所へ遊びに行くこともありました。お金がそんなにあるわけじゃないし、中国語もわからないし、子どももいるし、その頃には舅たちも安心してたのかもしれない。2、3年経ってからでしょうか、県の方の親戚のところに行き、買い物をしようと店に立ち寄ったことがありました。お店に立っていたら、友だちが、「この人知っている？」と聞いてきました。わたしは「知らない」と言うと、今度はその人に向かって「この人知っている？」と聞きました。その人も「知らない」と答えました。あいだに立った友達が「この人、何々さんだよ」って名前を言うと、なあんだ同級生じゃないかって、開拓団の時の学校の同級生じゃないかって。だいたいの方は帰国していたんですが、わたしたち2人ばかり残っていて、お互いに「日本に帰ったんだろなああって思っていたよ」なんて話しました。「ああよかった」って。あの時はうれしかったですね。開拓団の時の同級生は、17人でした。男が10人、女が7人。男の方はみんな兵隊に行って、女の方は7人いたんですが、1人が亡くなって、6人のうちわたしともう1人が残って、あとの4人はみんな早い時期に、昭和21年に日本へ帰ってきたそうです。

やっぱり帰りたい、逃げて日本に帰るっていっても、あとからになるほどだんだん難しくなるものです。子どももいるし、子どもを置いて帰って、もしかしたら新しいお母さんにいじめられるんじゃないか、いじめられて死んじゃうんじゃないか、と思ったりもして…。長く中国にいたのは、やっぱり子どものためですね。部落の人たちも、子どもらが中国におるんだから、帰るなって、日本に帰るなって、わたしを引きとめました。

6. 日中国交回復と一時帰国

日中友好を噂で聞く

そうこうしているうちに、田中総理大臣が中国へ来て、日中友好になって、「日本に帰られるよ」って、「日中友好になったから今度こそ日本に帰られるよ」って噂で聞きました。わたしたちが住んでいたのは、山の方の部落だったから、ニュースなんて何にもない、日本のこと

も何も聞いたことがない、みんな噂、人の噂ばかりでした。町の方に住んでいる人ならいろいろなことを知っていたのかもしれませんが…。「日本へ帰れる」と噂で聞いて、わたしも日本の親戚に手紙を書きました。山形に帰っている2番目のお兄さんの子どものところにです。住所もわかっていたし、手紙も自分で書かれるから、書いてやろうって。返事が来るかなあ、もしも返って来なかったらみんな死んでしまったってことだし、返ってくれば生きているし、って思って。1ヶ月以上経って、返事が来ました。ああ、生きていてよかった、よかったって、それこそ泣くばかりでした。2番目のお兄さんはもう亡くなっていて、お兄さんの子どもが手続きをしてくれて、里帰りすることになりました。

一時帰国

大きい子どもたちは連れて行かれないので、8歳だった一番下の娘1人だけ連れて里帰りに行きました。子どもたちは、日本に帰ったらもう中国へは戻って来ないんじゃないかって思ったでしょう。一番末っ子の男の子は、泣いて泣いて、追いつがりましたが、それでもわたしは、あっちこっちの日本人がみんな里帰りするんだからと、残していく子どもたちのことはあまり思いませんでした。1つのバスいっぱい里帰りする日本人でした。30人くらいいたでしょうか。喜んで歌を歌う人もいるし、悲しい人もいるし、泣いている人もいるし、いろいろでした。東も西もわからなくて、ハルビンに出たのもあの時が初めてです。ハルビンに泊まって、今度は汽車で北京に向いました。北京であっちこっち見学したんですが、わたしは風邪を引いて、行かなかったところもあります。そして北京から飛行機に乗って羽田空港に向かいました。

羽田に降り立つ

羽田に着くと、布に名前を書いて、それを胸につけました。「長野県」とか「山形県」と書いた旗を持って迎えの人が来るからそれを訪ねなさいと言われていました。わたしは山形だから、「山形」って書いてあるところあるかなあって、あっちこっち見回しました。「あああつた」「山形だ」って見ると、お兄さんの子、早くに日本へ帰ってきていたお兄さんの子が、役場の人と一緒に迎えに来ていました。

久しぶりの日本は、昔学校で聞いた浦島太郎、あれと同じだなあと感じました。夜になれば電気がピカピカで本当に美しくて、道を歩けば車がバーバーブーっていっぱい、歩くに歩けません。エスカレーターというのがあって、下がってくるのを待って、下がってくるのを待って、乗らなきゃいけないんですけど、本当にどういふんだかさっぱりわからなくて、乗り物に乗ることもできませんでした。

郷里山形へ — 三十年ぶりの兄との再会

東京から電車に乗り、山形に着きました。山形では、シベリヤから帰って来たお兄さん、一番上のお兄さんが迎えに来てくれました。30年ぶりくらいの再会でしたが、「あ、お兄さんだ」と見てすぐに分かりました。泣いて、泣いて、泣いてたら、お兄さんが、「いいよ、てる子泣かなくてもいいよ。会えたんじゃないか。日本に帰って来たんだから、泣かなくてもいいよ。」となくさめてくれたんですが、そう言われても、何を言われているのかわかりませんでした。

同窓会での友人との再会

帰ってしばらくして、同級生たちが同窓会に招待してくれました。同窓会を開いてもらっても、わたしは言葉もわからないし、行くのもなんだなあと思ったりもしたんですが、わたしはみんなのお世話で里帰りができたんだから、せっかくしてくれるっていうんだからと、行ってみました。わたしが会場に行くと、みんなが集まってきて、「この人知っているか」「この人知っているか」と聞くんですが、わからない、誰も知らないんです。みんな同級生か1級上か1級下ばかりなんですが、それでもみんな忘れていて…。でも名前を言えばわかるんですね。思い出すのも早いんですね。わたしたちの勉強した言葉は学校の言葉ばかりで、大人の言葉は知らなかったから、「ちょっとあれ何っていうんだっけ？」なんて聞くと、みんな親切に教えてくれました。ああこんなことも忘れていたんだなあって感じました。

1年生から6年生まで同級生だった友人が、「うちに来て泊まって行っていいよ」と言うので、2晩泊まりました。言葉も通じないんですが「泊まって行ってね」と言ってくれる人もいれば、「中国からバカが来た」という人もいました。あの頃わたしは毎日毎日、娘を連れて歯医者に通っていました。病院の待合室で暇そうに待っている娘の背中に「あいうえお」と書いてくれる人がいました。でも娘はなにもわかりません。わたしが「中国から来たから日本語わからない」と言うと、「ああ、中国か」って。揚原って名前を言えばみんな知っていました。わたしは誰も知らないんですが。「ああ、中国から来たの。ご苦労さま、ご苦労さま。」と言われた時には、本当にうれしかったですね。ああ、こういう人もいたって思って…。里帰りする前は、何十年も経って日本に帰るから、中国人と一緒にあって、ああバカしてるんじゃないかなあって（非難されるんじゃないかと）思ったりもしましたが、それでも帰りたくて帰りたくてしょうがなかった。それで帰って来たんですよ。

ほんとうに浦島太郎の気分

里帰りすれば、留守番とかお掃除とかお風呂焚きとかいろいろ家のことを手伝おうかなあと思っていたんですが、お風呂も焚かなくてもいい、ご飯も炊かなくてもいい、お掃除もしなくてもいい、ほんとうにびっくりしました。何にもしなくていいんだから。お兄さんがね、「ご

飯炊きは簡単だよって、電気をこう、電気さえ入れればいいから。」って言うんだけど、簡単だっていってもその電気をどうやっていれればいいのかわたしにはわかりません。昔はうちは囲炉裏で、火を炊いてそれでご飯を炊いていたんだから。掃除をするっていっても、昔は箒ではいて、板の間を拭いてしました。それが、こっちへ来たらみんな掃除機、電気さえつければみんなできるから…。ほんとうに浦島太郎の気分でした。

日本へ帰って来たって、わたしにできる仕事なんて何にもありません。ただ世話になるだけなんていやだから、いろいろ手伝おうって思って帰って来たのに、全部機械、全部電気で、どうすることやらさっぱりわかりません。お兄さんには、「いいよ、何にも仕事しなくていいよ」って、「自分の子どもさ見てろ」って言われても、働くことが身にしみてしまっているわたしには、戸惑うばかりでした。

親戚の人がお店に買い物に行こうって連れて行ってくれたことがありました。歩いていくと、途中で道に信号がありました。昔は信号なんてないから、知らないから、連れて行ってくれた親戚の人が「今赤信号だから渡れないよ」って言われてもなんことだかさっぱりわかりません。ずっと立ったまま待っていて、青信号に変わってもまだ立っていました。「今度は青だから渡ってもいいよ」って言われても、怖くてね、道を歩くのも怖かったですよ、あの頃は。

でも、帰ってきてよかったですね。向こうで亡くなった人はみんな「日本に帰りたい、帰りたい」って亡くなっていきましたから…。だから、生きていたよかったなあって、思いますよ。

再び中国へ

里帰りの期間も終わりに近づきとうとう今度は中国へ帰らなければならない時が来ました。あの時は、帰らない人もいました。わたしも帰らないところかなあと思ったけれども、でもまだ結婚していない子どもがいたので、だから中国へ帰らなきゃならんって思い、帰ることにしました。せっかく親戚や同級生と会って、いろいろ話しながらいるのに、帰らなければならんって、涙も出てきました。悔しかった…悔しいってうかなんていうか…。戦争がなかったらこんなこともなかったのにつて思ったりもしましたね。でも、中国に残ったのはやっぱり自分の子どもがいたから、もしも子どもがいなかったらと考えたりもしますけど…。残ったのはやっぱり子どものためですね。

7. 永住帰国

家族を振り切って、永住帰国

中国に戻ってまた10年ほど過ごし、昭和59年に帰国することになりました。山形のお兄さんの子どもは、今度は手続きをしてくれなかったの、山梨にいる兄の子どもに手続きしてもらいました。その人は中国にいたんですが、早い時期に日本へ帰国していました。わたしはその人に何回も何回も手紙を出して、保証人になってもらいました。2番目の息子とその嫁、それから末っ子の娘を連れて4人で帰国しました。その時は、言葉もわからない、何もわからないなか、兄の子どもがいろいろと手続きをしてくれました。

日本へ帰るって決めた時には、「揚原さん、日本に帰るの？日本に帰ったって、子どもはみんな中国にいるんだから、子どものことを思うよ。日本に帰らないほうがいいよ」と言う人もいました。でも、「わたしは日本人だから日本に帰るよ」って言って、「子どもなんかみんな大きくなって、自分で生活できるんだから、子どものことなんて思わないよ」って言って帰国を決めました。一番大きい娘も「お母さん、子どもはみんな中国にいるんだから、日本に帰らない方がいいよ。里帰りにした方がいいよ」って言いました。でも、家族を振り切り「わたし帰る」って、「みんな大きくなっからもういいでしょう」って、そう言って帰って来ました。

山梨で中国の子どもたちを想う

山梨に帰って来て、1ヶ月もしないうちに、県の方で仕事を探してくれました。掃除の仕事です。その仕事に行って、仕事をするのはいいけれど、それこそカラスが鳴くと、「ああ、カラスが鳴いているなあ。子どもが病気しているんじゃないかなあ」と思ったりしました。りんごやみかんを食べると、「子どもたちは今何を食べているのかなあ、中国にいたときはみかんなんて食べられなかったなあ」って思ったり…。一緒に帰国した息子に、「日本に来たんだから、りんごだみかんだっていっぱいあるから食べなさい」って言うと、「食べない」って言うんですね。「どうして食べないの？」って聞くと、「すっぱいの食べるとお父さんを思い出すから、食べない」って。なるほどなあって思ったりしてね…。やっぱり自分のお父さんのことだから思うんだなあって。中国では、みかんなんてありませんでした。安いしみたりんごを買ってきても、子どもたちに半分ずつ分けたら、わたしの口に入る分なんてなかったです。それでも、食べたいなんて気持ちもなかったですよ。子ども子どもって、子どもが大勢いたから子どものことで精一杯だったから。

日本語がわからなくて苦勞した

帰ってきたばかりの頃は、日本語もあまりわからなくて苦勞もしました。親戚と話している時、日本語で話しているつもりが、話しているうちにいつの間にか中国語で話していたりして、「あんた何しゃべってるの？わかんない」って言われて、また日本語で繰り返したりっていうこともありました。言葉ではやはり苦勞しました。辞典を買って、そしてテレビを見てわからない言葉があると紙に書いて、辞典で探して、また何回も何回も紙に書いてね、いろんなことを。今帰って来た人は、そんなふうに勉強しないですけどね。

子どもたちを呼び寄せる

それで、帰って来て、1年か2年くらい経ったら、今度は一番下の男の子が「日本に行くから手続きしてくれ」って言って来ました。そう言われても、わたしも日本に来たばかりで何もできないし、どうしたらいいかなあって思って、東京にいる同級生にお願いに行きました。そして、一番下の息子と嫁と子ども1人、それから旦那の4人が帰国して来ました。でも、その時は、うちはないし、親戚のうちに泊めてもらいました。その手続きが終わると今度は、また大きい息子たちからも帰るっていう手紙が来ました。それで、日本へ来るっていう人の手続きを先にして、里帰りに来る人の手続きは後回しにして、また帰国者の会の人をお願いをして、今度は、一番大きい娘と一番大きい大将息子が来ました。次に3番目の息子。毎日毎日、それが終わったら今度はあれ、と子どもたちを帰国させるための手続きに追われる毎日でした。

再び家族そろって

2番目の娘は、ずっと「わたしは帰らない、日本へは行かない。みんなが日本へ行くから、わたしはみんなに会いに里帰りに行くからいい」と言っていたので、その娘の手続きは一番最後に回しました。みんなの手続きが終わったら、今度はその娘から「みんな日本に行って誰もいなくなったよ。わたし1人になったよ。わたしも日本に行く」という手紙が来ました。その娘の旦那の妹が大阪にいたので、2番目の娘だけは大阪に行きました。「大阪に行ってみて、また東京に戻ってきたらいいんじゃないの」なんて話していたんですが、大阪の方がいいからって、大阪に住んでいます。子どもが1人でも中国に残っていれば、子どものことを思う、心配するだろうけど、みんな日本へ来ているから、心残りはないですね。

上京と子どもたちの自立

息子たちが帰国したころ、わたしも東京へ出てきました。山梨は日本語を習うところもないからです。上京してからは、^{しんこうそう}新幸荘という寮に住んでいました。言葉はわからないけれど、

少しは聞くことができたから、毎日毎日、子どもたちの区役所だ保育園だ学校だって、あちこち歩き回っていました。新幸荘に住んでいたのはだいたい中国から来た人で、その人たちに、「明日病院に行くから一緒に行ってくれ」、「区役所について行ってくれ」と頼まれ、毎日毎日、ご飯食べる暇もないほどの忙しさでした。わたしも中国に行ったばかりの時は、言葉がわからなくて苦労したから、日本に来た人たちも一緒だなあと思って。今はもう、みんな引っ越してしまっていないけどね。

わたしたちが帰国した頃が一番いい頃でしたね。子どもたちはみんな、区役所から手続きをして日本語学校に入れてもらって、1年間日本語習って、それから専門学校に行きたい人は専門学校に行って、そして卒業して、学校から紹介してもらって就職できましたから。そうでないと、あっちこっち自分で仕事探さなきゃいけないから、そうなると大変ですけどね。ただ一番下の娘には苦労をかけたと思います。あの子は、17歳で、中学卒業できたから、仕事もないでしょう。親はお金もないし。あの子は、自分でパーマの見習いに行きました。日本語も自分で勉強したから、わたしより知っていますよ。

子ども、孫、曾孫に囲まれて

今は、子どもたちもみんな日本にいるし、大きい孫たちは結婚したし、ひ孫も11人います。孫は、何人かなあ、19人だかいます。みんな大きくなって、自分の親もいるからあまり心配したりしません。日本では、電話1本で何でも通じるから。中国だと、行くに行かれない、行こうたってお金もないから、心配ですけどね。中国にいれば、子どもの面倒みてくれとか、留守番してくれとか言われますが、日本ならみんな保育園に連れて行くから、楽ですね。ただ、学校の運動会や学芸会があると、「おばあちゃん、見に来て」と孫から電話がかかってくるので、出かけます。うちの旦那は、全然出かけなくて、わたしばかりですね。孫たちの学校に行くと、自分が学校に通っていた頃のことを思い出します。学校に行っても何もないし、学校から帰れば子守とお掃除、食べるものも何もないし、学校は遠いから毎日太陽が出ないうちに家を出て、学校に着く頃にようよう太陽が出てきましたね、あの頃は。今の子どもたちは、ほんとに幸せだなあってつくづく思いますね。学校から帰って来たって、おなかすいたからって「お金」って言ってパン買って食べて、自転車で学校に行って、みんなきれいな服着て、ちがう鞆持って…。

ほんとうに今が一番幸せ

旦那も、お前のおかげで日本に来られて幸せだって言っています。子どもたちも1回中国へ帰れば、あまり行きたいとは思わないみたいです。中国もよくなったって言うけれど、やっぱり日本と比べれば全然違いますから。最初、孫たちを連れて中国へ行ったときに、ハルビンの公衆トイレの床が濡れているのを見て、「いやだいやだ」って、「汚いからいやだ」って、泣かれたことがありました。今はもう孫たちも大きくなったからもうそういうこともないん

ですけど…。わたしも、子どもたちはみんな日本に来ているし、親戚がいるわけでもないし、中国に行こうなんてあまり思わないですね。

今は、生活保護があるから、旦那と2人どうにか生活をしていられるから、それが一番だだと思います。息子たちにお金ちょうだいなんて言わなくてもいいから。いくら自分の子どもだからって、もらうっていうのは難しいから。あげるのならいいですけどね。子どもたちもみんな、自分の子どもが2人3人っていて、またお金がかかりますからね。自分で生活してくれればそれが一番いいと思います。結婚した孫たちにしても、自分の親もいるし、子どもがいてもわたしは何も心配しなくていいから。今はもうわたしなんかあまり関係ないみたいですね。中国にいれば朝から晩まで、忙しい忙しいって、「子守に来てくれ」「留守番してくれ」って頼まれるけど、日本はそういうことしなくていいから、子どもはみんな保育園へ連れて行くから…。本当に今が一番幸せだと思います。

娘たちが近くにいるから、何をすることも安心ですね。去年、お掃除やろうかなあってやったらね、踏み台から落ちて、腰を痛くして動かれなくなってしまったことがありました。それで、娘が病院に電話してくれて、タクシーで病院まで連れて行ってくれました。今はもう動かれるようになったけど、やっぱり子どもが近くにいれば安心だなあって思いますね。

最近、孫たち、息子たちから電話が来れば、あっち行ったりこっち行ったり、友達、中国にいたときの同級生のところへ行ったりして、遊んで暮らしています。友達は、遠くに、^{あだち}足立区の方に住んでいるんですけど、バス券があるから、時間はかかるけどバスで行かれるから便利です。仕事してないから、お金払うより、バス券使った方がいいでしょう。やっぱり東京は住みやすいから、ここらへんは便利です。駅は近いし、バスだって、買い物だって、区役所だって、みんな近いから。便利ですからね、今の生活が一番幸せだって思いますね。

友だちのうちに行けば、泊まって行け泊まって行けっていうから、1晩2晩泊まってくることが多いです。行けば中国にいたときの話になります。あんなことがあったっけ、こんなこともあったっけね、笑ったり泣いたりしてね。おんなじ話の繰り返しなんですけどね。

思えば、中国で死んだ人はほんとうにかわいそうです。「日本へ帰りたい、帰りたい」って言って亡くなっていましたから…。若くして亡くなっていった人もいるから…。あたしは生きているから、生きて帰って来れたから、生きてきてよかったなあって、つくづく思います。

中国にいれば、もうとっくに死んでしまっていたかもしれないですね。生活はよくないし、寒いし…。日本はあったかいし、生活もいいですから…。中国にいた時、病気をすると、「白いご飯食べたいなあ」って、「白いご飯に梅干食べたいなあ」って、そんなことばかり思っていましたね。だって白いご飯なんて見ようたって見られないんだもの。「満洲に行けば白いご飯が食べられる」って言われたけれど、本当に白いご飯を口にできたのは、あれから40年以

上も経ってからでしたからね…。

時代が変われば、人も変わるっていうけど、ほんとに変わるなあって、最近思いますね。わたしたちは小さい頃からずっとろくに学校も行けなくて忙しい忙しいって過ぎてきたから、孫たちには、よく学校に行って、一生懸命勉強して、立派な人になるようにって思っています。けど、思っていたってしょうがないですよ、その人その人の人生ですからね。

わたしたちも中国で苦勞した苦勞したって言っても、苦勞苦勞も人それぞれですからね、みんな同じじゃないから…。苦勞してきたけど、生きてきたからこうやって、わかっているけど、亡くなった人は、その苦勞を話すこともできなくていっちゃいましたから…。すべて苦勞してきたから、今は幸せに暮らしているのが、ほんとうにありがたいなあって思うだけです。これからも頑張って少しでも長生きしようかなあって思いますね。



聞き書きを終えて

2003年3月3日、小雨まじりの肌寒い日に、地下鉄の出口から程近いところにある都営住宅に揚原さんを訪ねました。73歳とは思えないほど元気な足取りで、通りまで出迎えに来てくださりました。今は、ご主人と2人暮らしというつつまじやかな生活ぶりがかがえる部屋の壁には、てる子さんが3歳の時にお亡くなりになったというお母さんと、方正県の嫁ぎ先で看取ったというお父さんの写真が飾られていました。渡満から40数年を経て帰国したてる子さんのために、山形にいたお兄さんが焼き増してくださったものだそうです。

物心ついた頃から幼い姪達の子守に追われ、満洲に渡ってからも開拓団での子守と畑仕事、17歳で嫁いでからは7人の子どもたちの子育てに追われ、帰国してからは子どもや孫たちのさまざまなお手続きや世話に追われてきたという人生を、3時間近くかけて語っていただきました。

満洲での生活について、「亡くなった人のところにお供えしてある饅頭を取って食べたりしても、怖いなんて気持ちはなかった」、「父が亡くなったからって、悲しいなんていう気持ちはなかった」、「子どもが可愛いなんて気持ちもなかった。ただ、どうにかこうにか自分たちで生活できるまでに育てば、そこまで我慢して育てれば、ってそればかりだった」と、淡々と語られるその背後に、率直に自分の感情を表出させることを許さないような、数々の過酷な体験の積み重ねと、様々な社会の状況があったことに、わたしたちは思いを至らせなければならないでしょう。そんな揚原さんでしたが、里帰りの期間が終わり、中国へ戻らなければならなくなった時のお気持ちを語った時には、「悔しかった…悔しいっていうかなんていうか、涙も出てきた」と、ご自身の感情を吐露なさいました。何度も何度も語られた「命あって日本へ帰る、ってそればかりだった」という思いの深さを、改めて感じさせられました。

誰を恨むでもない淡々とした語り口、全てを受け入れどんな逆境にあっても「今」を生き抜いてきたからこそその達観した微笑み、そして手の甲に深く刻まれた皺から、「働くことが身に染み付

いてしまっている」という、その人生の歩みの重さがひしひしと伝わってきました。揚原さんのお話は、物にあふれ、情報にあふれ、自分自身を見失いがちな現代を生きているわたしを、「命の重さ」「生の尊さ」という“人としてあること”の原点に立ち戻らせてくださった気がします。

今は、7人のお子さんと19人のお孫さん、11人の曾孫さんに囲まれ、お正月やお誕生日にはにぎやかに過ごされているそうです。ご家族の方々一人一人が、「今が幸せ」と心から言えるような日本社会であるよう、そのような社会になるよう願ってやみません。

貴重なお話をお聞かせくださいましたことに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。**(ひろさき じゅんこ)**

